

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	物語・日記文学と和学者たち：清水宣昭『紫式部日記釈』を中心に
Author(s)	小川, 陽子
Citation	国文学攷 , 244 : 19 - 30
Issue Date	2019-12-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049730">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049730</a>
Right	Copyright (c) 2019 by Author
Relation	



# 物語・日記文学と和学者たち——清水宣昭『紫式部日記釈』を中心に——

小川陽子

## はじめに

『紫式部日記釈』は、尾張の和学者である清水宣昭（寛政五  
〇一七九三）〜明治元（一八六八）年<sup>①</sup>が作成した注釈書である。『紫  
式部日記』の注釈書でこれに先行するものとしては、壺井義知『紫  
式部日記傍注』（享保十四（一七二九）年刊）、足立稲直『紫式部日  
記解』（文政二（一八一九）年）の二書が認められるが、前者は簡  
単な注記を施したにすぎないもの、後者は公刊されていないもので  
ある。このことから、福家俊幸氏<sup>②</sup>は、『紫式部日記釈』について、「江  
戸期に衆目に触れた初の本格的な注釈書と言って良い」と述べてお  
られる。天保五（一八三四）年に刊行され、好評を博したことが、  
宣昭の師である藤井高尚からの書簡によって確認できる。

『紫式部日記釈』之御著述、大分二天下二弘り候様子にて、遠  
国所々々、貴家之御事申来り<sup>③</sup>

その後、昭和に到るまで繰り返し出版され<sup>④</sup>、池田亀鑑が「研究者  
の必ず一読すべきもの」と記したように<sup>⑤</sup>、高く評価されてきた。

『紫式部日記釈』の作成・出版過程および宣昭の人となりについ  
ては茅場康雄氏<sup>⑥</sup>が、また『紫式部日記』享受史における位置付けに  
ついては福家氏が、それぞれ詳述しておられる。本稿では、先学の  
研究に導かれつつ、『紫式部日記』という一作品の枠を越えて、和  
学者の営みの中に『紫式部日記釈』がどのように位置するのかを探っ  
てみたい。具体的には、俗語訳の生成および物語・日記文学の受容  
という二つの側面に注目していく。

## 一 俗語訳の生成

『紫式部日記釈』（以下、『釈』と呼ぶ）には、藤井高尚による  
序（天保四（一八三三）年）、宣昭による凡例（文政十三（一八三〇）  
年）、鈴木胤による跋文（天保四年）が付されている。藤井高尚

は、凡例末尾において宣昭みずから「師といふは吉備の道の中の宮の郷の松の屋の藤井大人」と記すとおり、宣昭の師である。鈴木胤も、「親密な師弟関係」にあることが茅場氏によって明らかにされた。すなわち、『釈』には師二人による序跋が付されているわけである。

『釈』の内容について右の序・凡例・跋文を確認すると、注釈ではかえって煩雑でわかりにくいものは俗語に訳したこと（凡例「注釈にては、中々にくた／＼しくまとはしきか、今の俗語に訳していへは、こともなくき、とりやすきたくひは、すへて俗語に訳していへり」）、高尚の注が反映されていること（序「高尚かおろかなる説をも所とくはへなとして」、凡例「この書のしたかきを、師君のおまへにまゐらせたるに、おほしよれること、も、かきてかへし給へるを、師のいはれしとて、しるし、なり」）等が述べられている。<sup>8</sup> 俗語を用いている点は『釈』の特徴と言つてよく、現代においても、「平明な俗語による詳細な語釈が施され、無理のない穏健な注釈を示し」た書として評価されている。<sup>9</sup>

なお、序・凡例・跋文のいずれにも特に記載はないものの、高尚に次いで胤の説も数多く記されており、両者の引用が際立って多いことが茅場氏によって明らかにされている。<sup>10</sup> また、この二人の説が取り込まれていることから、福家氏は「この時点での鈴屋門の英知を集結した書として、受け止められたといつてよいのではないだろ

うか」と述べておられる。本居宣長との関連については、茅場氏も（小川注・口語訳は）直接には胤の影響と考えて間違いないであろうが、根幹には宣長の『古今集遠鏡』の形式があるものと思われる<sup>11</sup>と指摘しておられる。いずれも首肯すべき見解であろう。しかし、両氏ともにこの記述以上の言及はしておられず、これまでのところ宣長からの影響・継承について具体的な検証がなされているわけではない。和学者の営みの中に『釈』を位置付けていくためにも、まずはこの点について検討していきたい。

『釈』の俗語訳は、たとえば次のような形で記されている。

はかなきは、キトセヌといふ意、ナンテモナイといふ意なり、物かたりは、ハナシなり

凡例に「かたかなにて書るところ、みな訳なりとするへし、また訳していへるところならても、俗語にいへるは、みなかたかなにてかけり」と記されているとおり、カタカナ表記されているのが俗語である。一見して明らかたとおり、注の中に俗語が組み込まれている。その一部は、茅場氏の言われるとおり、「たふとは、スシヨウニアリガタイなりと鈴木朗翁いはれたり」のように胤の説を引用する形で示されている。さらに、俗語に関する胤の影響は、夙に池田亀鑑が指摘しているとおり、引用書物にも及んでいる。

たをやかならずは、シンナリトセヌ意なり。たをは撓なりと、雅語訳解に見えたり

このように、服の著した『雅語訳解』という俗語訳辞書からの引用が散見されるのである。その『雅語訳解』の凡例には、次のように記載されている。

○解より訳の便りよき事、先師の古今遠鏡に論ぜられしが如し、此書は遠鏡に本づき、または諸先師の注釈によりて、訳解を兼用て、雅語を部類して、檢討に便ならしむ。

「先師の古今遠鏡」「此書は遠鏡に本づき」とあり、服の師すなわち宣長の『古今集遠鏡』から強く影響を受けた辞書であることがわかる。つまり、宣長が『古今集遠鏡』において『古今和歌集』の俗語訳を行い、それを承けて服が俗語訳辞書『雅語訳解』を作り、さらにそれを宣昭が『紫式部日記釈』に引用したという関係にあるわけである。

このような三者の影響関係は、俗語訳という方法に対する基本的な考え方という点でも認められる。『雅語訳解』の凡例には「解とは、訳にて明しがたく尽しがたき所をば、注釈の詞してとくを云」「解より訳の便りよき事、先師の古今遠鏡に論ぜられしが如し」とあり、注釈よりも俗語に訳すことが時には有効であるという考えを宣長から継承したことがわかる。『釈』は宣長に言及していないが、凡例における「注釈にては、中々にくたくしくまとはしきか、今の俗語に訳していへは、こともなくき、とりやすきたくひは、すへて俗語に訳していへり」という「注釈」と「俗語に訳す」との対比は、

まさに服のあり方と同様である。

同じように宣長から服という流れを承けて俗語訳が行われた作品がもうひとつある。『源氏物語』である。栗田直政が著した『源氏遠鏡』は、「遠鏡」と命名されていることから明らかとなっており、『古今集遠鏡』の影響を受けたものである。その凡例には、

○さきに紫文蛭嘯とて桐壺帯木空蟬の三巻を通俗にしたる本ありそのときかたはよろしからざる所々もあれど大方は初学の人に便りよき物なれば此書は其緒を續きて若紫より書初めて訳は古今遠鏡にならひてさとびことにて物しつ

○吾師はやくより此書を通俗にせんと思ひわたられたるを何くれと事しげくいとまなければおのれその志をうけ其たゞしを請ひて物したる也。

とあり、直政が師の志を承け、『古今集遠鏡』にならって『源氏遠鏡』を著したことが確認できる。ここで言う「師」とは、『源氏遠鏡』の内題に続いて「離屋鈴木先生訂閲」とあるとおり、鈴木離屋すなわち鈴木服である。つまり、宣長の学問を継承した服の志を承けて当該書が成立したのであり、宣長↓服↓弟子という『釈』と同じ構図が認められる。

『釈』と『源氏遠鏡』が『古今集遠鏡』から影響を受けた近しい作品であることを形態面からも確認しておきたい。江戸時代におけるこの二作品以前の主な『源氏物語』俗語訳と『紫式部日記』注釈

は次のとおり。<sup>17)</sup>

『紫式部日記』注釈

紫家七論

風流源氏物語

元禄16 〔1703〕

若草源氏物語

宝永4 〔1707〕

雛鶴源氏物語

宝永5 〔1708〕

紅白源氏物語

宝永6 〔1709〕

俗解源氏物語

宝永7 〔1710〕

紫文蛭の囀

享保8 〔1723〕

紫式部日記傍註

享保14 〔1729〕

湖月抄諺解

文化8 〔1811〕

紫式部日記解

文政2 〔1819〕

紫式部日記積

天保5 〔1834〕

紫式部日記積

天保10 〔1839〕

紫式部日記解

天保11 〔1840〕

源氏遠鏡

まず十八世紀はじめ、『風流源氏物語』から『紫文蛭の囀』まで六種の『源氏』俗語訳が立て続けに出版されたわけであるが、これらはいずれも挿絵を含むことが特徴のひとつである。<sup>18)</sup>これに対し、『積』も、さらに凡例で『紫文蛭の囀』を継ぐと明言している『源氏遠鏡』も、挿絵を持たない。まずこの点において、この二作品は十八世紀前半の『源氏』俗語訳とは一線を画していることが確認で

きる。

さらに版面（次頁参照）も見ておきたい。<sup>19)</sup>

『紫文蛭の囀』は、『源氏』本文をすべて俗語に置き換え、頭注の形で簡易な注を載せる。また『紫式部日記傍註』は、その名のとおり本文の傍らに簡易な注を載せ、傍注では示しきれないものについては本文上部に注記する。これに対し『古今集遠鏡』『源氏遠鏡』は、まず作品そのものの本文を載せ、続いて二文字下げで俗語訳や注釈を載せる。

また俗語訳部分の表記を見ると、『紫文蛭の囀』がひらがなを用いるのに対し、『古今集遠鏡』『源氏遠鏡』はそれぞれの凡例に示されているとおりカタカナを用いている。<sup>20)</sup>なお、『源氏物語玉の小櫛』においては、「俗言に、たいがいよきといふほどのこと也」と俗語「たいがいよき」がひらがなで書かれていることから、俗語をカタカナで書くことが当時の共通したあり方であったわけではないことを押さえておきたい。『積』と『源氏遠鏡』の俗語カタカナ表記は、『古今集遠鏡』の影響下にあると見るべきであろう。<sup>21)</sup>『紫文蛭の囀』は、俗語訳を注釈的に用いていることがレベッカ・クレメンツ氏によって指摘されているように、それ以前の俗語訳とは一線を画すものである。その『紫文蛭の囀』でさえ、『古今集遠鏡』『積』『源氏遠鏡』とは挿絵・注の位置・俗語表記いずれもまったく異なることに注意しておきたい。



岳に学んでいる。宣昭と直政は同じ文化圏にいたわけで、そのような学問的な繋がりの中で生まれた書物のひとつとして『釈』を位置付けることができよう。

## 二 物語・日記文学の受容

次に、俗語訳の問題から離れ、宣昭の物語・日記研究について検討する。まず注目したいのは、『釈』における『とりかへばや』引用である。卷三に、

あいきやう、今いふとまたく同じ、とりかへばや物語に、あたりにも、こほれちるあいきやう、など、見えたり

と、『とりかへばや』を用例として注釈を施す箇所がある。『とりかへばや』は現存伝本が百本を超え、いわゆる中世王朝物語の中では突出して享受資料が豊富な作品と言えようが、宣昭所持本『とりかへばや』については管見に入らない。しかし、右のとおり『釈』には確かに物語本文が引用されており、宣昭が何らかの形で『とりかへばや』を読んでいたことを証拠づけるものと言える。

なお、宣昭と『とりかへばや』との関わりは、断片的な情報であれば存在する。神宮文庫所蔵『とりかへばや』の見返しには、

宣昭云安藤為章ノ年山紀聞ニ云按ずるにとりかへばやは源氏狭衣などより後に作れる草子とみゆ宣耀殿実権中納言経兄妹ととりかへて作れりトイヘリ四ノ巻になにかしの大將の笛の笛のねに

めて、おりくたりける天つをとめもみ、とめつへかりけるにトアル大將は狭衣大將ヨイヘルナルヘケレハモトヨリ狭衣已後ノ草子ナルコト論ナシ マタ上野沼田伊藤光中傳説ニハコノ物語ノ歌風葉集ニミエタレハ狭衣ヨリハ後風葉ヨリハ前ノモノトハ云リ

のように、「宣昭云」として、この物語に関する宣昭の言説がわずかながら記されているのである。二重傍線部のように名前の引かれている伊藤光中傳は清水浜臣の門人で、「おそらくは『とりかへばや』享受史上最も早い時期の総合的な注釈書」を作り上げた人物である。宣昭がどこから光中説を入手したのかはわからないが、幅広く情報を収集していたことがうかがわれる。ただし、神宮文庫本の奥書は「右このふみは本居三四右衛門がもとよりおこせしなり享和三年夏山田六郎高村書 十一年九月三日よみをへつ 松琴」とあるのみで、どういう経路をたどって宣昭の説がここにもたらされたのかは不明である。奥書にいう享和三（一八一八〇三）年と宣昭の生年（寛政五（一七九三）年）に鑑みれば、親本たる本居三四右衛門（本居大平）本からの引き写しではないだろう。

もうひとつ、宣昭と『とりかへばや』との関わりで重要なのが、文政六（一八一三）年に藤井高尚から送られた次の書簡である。

一『大和物語』・『とりかへばや』・『紫式部日記』等、善本見当り申候ハ、可申上由承候。『とりかへばや』ハ、正し候ニも及

申ましく候。』<sup>(28)</sup>

『大和物語』『とりかへばや』『紫式部日記』等の善本を見つけたら知らせてほしい、という宣昭の依頼に対し、高尙が了承したものと解せる。『とりかへばや』ハ、正し候二も及申ましく候」と述べていることから、高尙じしんはわざわざ善本で校訂するほどでもないと考えていたようであるが、宣昭の思いにこたえようとしたことがわかる。宣昭は『とりかへばや』の善本を探していたわけで、それはすなわち、すでにこの物語を読んだことはあるけれども、その本文に問題があると判断し、より良い本文で再度この物語を読みたいと願ったということであろう。この手紙は『釈』出版以前のものであるので、宣昭がこの後に善本を手に入れて『釈』にそれを引用したのか、あるいは善本を手に入れられぬまま、本文に問題があると危惧した伝本を不意ながら引用したのかは残念ながら不明であるが、いずれにせよ、宣昭が『とりかへばや』を確かに手にしたこと、『釈』によって裏付けられることは注目すべきであろう。

この文政六年の手紙からは、宣昭が幅広く物語・日記に興味関心を抱いていたこと、善本を求めるといふ研究的姿勢を持っていたことがうかがわれるわけであるが、このような宣昭のあり方は『釈』における引用書目および他の資料からも確認できる。

まず『釈』には『竹取物語』『うつほ物語』『伊勢物語』『大和物語』『蜻蛉日記』『狭衣物語』等の作品あるいは『竹取翁物語解』『伊勢物語

新釈』『花鳥余情』等の注釈書類からの引用が数多く存する。<sup>(29)</sup>また『伊勢物語』『土佐日記』については宣昭書き入れ本が現存する。<sup>(30)</sup>さらに、文政十三(一八一三)〇年の高尙からの書簡には、

紫式部日記御注釈被成候由一段の事二候、拙老江戸にて先年古写本数本ヲ以、物語冊子類を校合致置候、貴君へ其中著述御勸め申、拙子骨折候事も後世に残し置度。<sup>(31)</sup>

とあり、高尙が複数の物語についてそれぞれ古写本数本を手に入れて校合をしたこと、その資料をもとに宣昭へ研究書の執筆を勧めていることがわかる。この件は、翌年の手紙において、

此日記(小川注・『釈』)御書終被成候ハ、『さ衣物語』を御勸め申度候。此物語は、拙子江戸二而数本取出し、一ヶ年も懸り異同校合いたし立御坐候。夫ヲ御譲り申候へハ、行届候御校合二成、御勞大二に少く、此義京二而懸御目候ハ、御咄可申上と、『釈』の執筆が終わったら『狭衣物語』をお勧めしたい、この物語は高尙が江戸にて一年がかりで複数伝本の校合を終えている、これを宣昭に譲れば宣昭の負担も大いに軽くなるだろう、と具体化している。残念ながら宣昭の関与した『狭衣物語』研究書は現在のところ知られていないが、『釈』の『狭衣物語』引用によって、少なくとも宣昭が『釈』執筆時点で『狭衣物語』を参照できる環境にあったことがうかがわれるわけである。

なお、『釈』には「おのが姨捨山の考といふもの、中に委しくい

へれば」という記述があり、宣昭には『姨捨山考』という著書も存在したことが知られる。同書は現在その所在を把握しえないが、市橋鐸氏によれば、

この書は姨捨山そのものに就いての考証でなく、「大和物語」所載の姨捨山伝説を、地名から思いついて作爲したものだと言ったもの。著者のねらいは、「作り物語」の本質というところにあつたようだ。文政八年頃の成立。奥田常雄の「芽垣内叢書」に採録せられていた。<sup>33)</sup>

とのことである。

以上のように、宣昭は、中古の物語および日記文学を研究的視点から幅広く受容していたのであった。ここで『釈』に立ち返り、『とりかへばや』引用に目を向けてみたい。改めて述べるまでもないが、たとえば『弄花抄』で『浜松中納言物語』を取り上げているように、注釈書は必ずしもその対象作品成立以前の作品のみを引用してきたわけではない。このため、『紫式部日記』に注釈を施すにあたり、成立時期の下る『とりかへばや』を取りこむというあり方そのものは特異なものではない。しかしそこで『とりかへばや』が選ばれたのは、この物語が近世に入って、とりわけ宣長の周辺で広く読まれていたことに関わるのではないだろうか。西本寮子氏は、

伝本所持者の門人たちがそれぞれ師の学問を継承する過程で次々と事跡を残していくことになったから、宣長を含めて真淵

門下の人々が相次いで伝本を入手したことが、その後の享受の基を築いたと言えるかもしれない。結果として文化文政期が書写や施注、注釈が盛んに行われた、ひとつのピークになった。<sup>34)</sup>

と述べておられる。『釈』は、前節で確認したように宣長の影響下にある。『釈』の凡例が記されたのは文政十三年のこと。文化文政期に盛んに行われた『とりかへばや』の書写や施注が、他作品の読解、注釈へと影響を及ぼした例として、『釈』を位置付けることができよう。和学者たちがさまざまな書物を手に入れ、研究を進めることにより、注釈に活用される文献にも広がりが出た。そのひとつの現れとして『釈』を捉えたい。

#### おわりに

以上、俗語訳および引用文献を視座として、和学者の営みにおける『釈』の位置を探ってきた。では、これはいったい誰に向けて作られた注釈書だったのであろうか。『釈』の凡例では、

・この日記、源氏物語をたに、よくよみたらん人は、注釈にもおよふましけれど、すへてもの、ちうさくは、初学の人のためにこそあれ、識者のためのものならねは源氏物語をも、いまた、えよまぬ人のためにとてなん

・なにも、みな初学の、見やすからんためとのしわざ

のように、「初学」という語が繰り返され、識者ではなく初学者の

ためにものしたということが強調される。

しかし、このように初学者を意識し、平易を旨とするあり方と、『とりかへばや』を引用するというあり方とは、いささか開きがあるようにも思われる。『とりかへばや』は、書写や施注が盛んに行われたとはいえ、あくまで写本として人から人へと伝えられる形で一部の人々へのみ流通していたものであった。それを念頭に置きつつ、改めて『釈』の凡例を読み直すとき、「源氏物語をも、いまた、えよまぬ人のため」とうたう一方で、次のようにも記されていることに留意される。

源氏物語五十四帖は、誰もみなよくしりたることにしあれば、ちうさくの中に引いて、いへる所にも、たゞ巻名のみをあけたり『源氏物語』をよく知っていることを前提とする文言である。すなわち、『源氏物語』をよく知り、『とりかへばや』をも知っている、あるいは関心がありそうな、一定の知識を持った人々もまた読者として想定されているのである。それは、注釈本文における、

・なほ例ともあまたひきいて、玉の小櫛のそへくしに委しういへり、ことなかければ、こゝには省けり

・このこと、おのか姨捨山の考といふもの、中に委しくいへれば、こゝには省く

・こゝに見えたる本さうしの委しき考へは、松の落葉に見えたりといった、他書を参照せよという姿勢とも通ずるものである。

『釈』売り出し時の袋には、高尙が、

此日記は源氏物語と同じ作者なれば彼ものがたりを見給はん人はまつこれをよく見て作者の心をしり給ふべき事にぞしかるに昔より注さくまれにしてよみえがたき日記なればとて初学の人までもいとよく心えらるべきやうにくはしくときさとされたる此積なり

と記している。『源氏』読者への言及とともに、「初学の人までも」(傍点稿者)とあることに注意しておきたい。ここで意識されているのは、一定の知識を持つ人から、初学者まで、ということであろう。凡例における、「源氏物語をも、いまた、えよまぬ人のため」とも、「源氏物語五十四帖は、誰もみなよくしりたる」ともいう、矛盾しているようにも思える表現は、宣昭じしんの想定がたしかにその双方にわたっていたことを記し留めるものであり、師たる高尙はそのあたりをよく理解していたことが、ここからうかがわれるのである。

このような『釈』のあり方は、『古今集遠鏡』に対する「初学者と一歩進んだ研究者の両者に開かれている注釈書」という田中康二氏の評言を想起させる。注釈史の厚みの相違、またジャンルの相違から、『古今集遠鏡』とまったく同一の方法は取られなかったが、『紫式部日記』の置かれた状況を踏まえ、俗語訳という重要な手法を引き継ぎながら、当時におけるこの作品にふさわしいひらき方を採り当てた結果が『釈』という注釈書であったといえよう。そのように

宣昭が幅広い読者を想定しながら注を施したことが、昭和までも度重なる出版、さらには現代における高評価へと繋がっていったのであった。

注

- (1) 福家俊幸氏『紫式部日記解』『紫式部日記釈』についての一考察「江戸期の『紫式部日記』研究」(『紫式部日記の新研究 表現の世界を考える』二〇〇八年、新典社)。以下、福家氏の御論の引用はすべて同書による。
- (2) 天保八年十二月八日付書簡(飯田正一氏「藤井高尚書簡集(四)」『国文学研究』第58巻 一九七六年二月)
- (3) 同書の出版については茅場康雄氏が詳細に論じておられるが、新たに管見に入ったものがあるため、補足しておく。茅場氏によれば、「少なくとも四巻五冊本として一度、四巻四冊本としては四度摺られたことを確認できる」(『清水宣昭考 三』『学苑』第625号 一九九一年一月)とのことで、氏が掲出された四巻四冊本は、1河内屋儀助版、2河内屋喜兵衛版、3光文書房版、4鹿田松雲堂版の四種である(番号は私に付した)。このうち3については、茅場氏は明治初年から同五年までに刊行されたことを明らかにされたのであるが、これが後年さらに5朝陽館版、6大阪偉業館版として少なくとも二度刊行されていることがわかった(5は国立国会図書館デジタルコレクション〈書誌ID00000547332〉、6は早稲田大学古典籍総合データベース〈請求記号 文庫30 E0034〉掲載の画像による。なお、茅場氏が未見とされた4も同データベース〈請求記号 文庫30 E0032〉に画像が掲載されている)。5の刊記は次のようにある。

明治二十三年五月補刻  
同 五月製本

定價金八十錢

発兌所 朝陽館  
同 柏原政次郎

続いて「弘寶書肆」として吉川半七ほか七書肆が列挙されている。また6は刊行年不明であるが、第四卷末に「大阪偉業館蔵版」として岡本仙助、岡本ウノ、北島長吉の名が列ねられている。なお、3が「鈴木胤の跋を巻頭に置き、跋文から始まる」という変則的な体裁になっている(茅場氏)のに対し、5、6はともに胤の跋文を第四冊末尾という本来の位置に配している。以上のことから、四巻四冊本は少なくとも六度の出版が認められる。

- (4) 池田亀鑑執筆「紫式部日記釈」項『日本文学大辞典』一九三四年、新潮社
- (5) 茅場康雄氏「清水宣昭考 一(五)」「学苑」第617〜634号 一九九一年三月〜一九九二年九月
- (6) 『紫式部日記釈』の引用は、新潟大学附属図書館佐野文庫蔵本(同大学古典籍データベース収載画像)による。
- (7) 前掲注(5) 茅場氏「清水宣昭考 一」。なお、宣昭の師としてはもうひとり本居春庭がいるが、茅場氏は「その関係は淡いものであったようである」と述べておられる。
- (8) 高尚が書き入れを施した手沢本「紫式部日記傍註」が岩瀬文庫に現存し、その内容から鑑みて『釈』の成立とも深く関わるのが工藤進忠郎氏によって指摘されている(松の屋旧蔵『紫式部日記傍註』の書入れ注記(一)〜(三))。『岡山大学文学部紀要』第7〜9号 一九八六年二月〜一九八八年六月。
- (9) 南波浩氏執筆「紫式部日記釈」項『日本古典文学大辞典』一九八四年、岩波書店
- (10) 茅場康雄氏「紫式部日記釈」引用の鈴木胤の注釈(『文莫』第19号 一九九四年一月)。「鈴木翁」としての説は、胤から宣昭が直接に受け

た教えであるとしてよいように思われる。「高尚だけでなく、眼についても『日記釈』の草稿をなんらかの状況で校閲した可能性を考えておく必要があるように思う」と指摘しておられる。

(11) 茅場氏前掲注(10) 論文

(12) 前掲注(4) 辞典

(13) 『雅語訳解』の引用は、国文学研究資料館初雁文庫蔵本(新日本古典籍総合データベース収載画像)による。引用にあたって私に傍線を施した。以下、引用文における傍線、四角囲みはすべて稿者による。

(14) 近世における俗語訳の概念および意義については、レベッカ・クレメンツ氏「江戸時代における俗語訳の意義」(『源氏物語の近世—俗語訳・翻案・絵入本でよむ古典』二〇一九年、勉誠出版)に詳しい。

(15) 野田昌氏「解説」(『源氏遠鏡』一九九一年、勉誠社)に掲出された「凡例」による。この凡例は栗田直政の詠草に記されたもので、鈴木眼による添削がなされており、本稿ではその添削を反映した形で本文を整理、引用した。なお、『源氏遠鏡』は出版されているが、刊本にはこの凡例が存在しない。

(16) 『古今集遠鏡』と『源氏遠鏡』の関係性については、田中康二氏「俗語訳成立史」(『本居宣長の国文学』二〇一五年、ベリカン社)に詳しい。

(17) 『源氏物語』俗語訳は、レベッカ・クレメンツ氏「もう一つの『注釈書』—江戸時代における『源氏物語』の初期俗語訳の意義—」(『平安文学の古注釈と受容』第3集 二〇一一年、武蔵野書院)による。

(18) 近時、前掲注(14)『源氏物語の近世—俗語訳・翻案・絵入本でよむ古典』において、『風流源氏物語』から『俗解源氏物語』までの五作品はいずれも翻刻、注解、挿絵および解説が供された。さらに同書には論考篇も収載されており、近世における『源氏物語』を今後考究していく上で欠かすことのできない一書と言えよう。

(19) 図版は次の諸本による。『紫文蚤の囀』国文学研究資料館初雁文庫蔵本(クリエティブ・コモンズ 表示 4.0)、ライセンズ(CC BY-NC)、『紫式部日記傍注』国文学研究資料館蔵本(クリエティブ・コモンズ 表示 4.0)、ライセンズ(CC BY-NC)、『古今集遠鏡』岐阜大学図書館蔵本、『紫式部日記釈』新潟大学附属図書館佐野文庫蔵本、『源氏遠鏡』筑波大学中央図書館蔵本。

(20) 『古今集遠鏡』『釈』『源氏遠鏡』も俗語以外の部分ではひらがなを用いている。

(21) ただし、『源氏遠鏡』が『古今集遠鏡』と同様に作品の全文を俗語訳することを志向したのに対し、『釈』はあくまで注釈の一部として俗語訳を採用した。それはおそらく扱う作品そのものの注釈史の厚みの相違によるものであろう。このため、『源氏遠鏡』の版面が『古今集遠鏡』のそれにきわめて近いのに対し、『釈』は異なる部分も少なくない。しかし、性質の異なる書物でありながら、本文と注の配置、俗語のカタカナ表記という共通性を有していることを重視したい。

(22) クレメンツ氏前掲注(14) 論文

(23) 野田氏前掲注(15) 論文

(24) なお、高尚手沢本『紫式部日記傍註』に「とりかへばや」引用はなく、『雅語訳解』の「あいややう」項も「愛キヤウ」と記すのみであるので、『釈』の『とりかへばや』引用は宣昭の見識を示すものと見てよいだろう。

(25) 国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる。

(26) 伊藤光中については、新居和美氏による「伊藤光中の『とりかへばや』研究—桃園文庫本・静嘉堂文庫本を中心として—」(『古代中世国文学』第20号 二〇〇四年一月)ほか一連の論考に詳しい。

(27) 西本寮子氏「誰が読んだのか—江戸時代の『とりかへばや』享受—」(『日本文学』第54巻第2号 二〇〇五年二月)

(28) 文政六年四月七日付書簡(飯田正一氏「藤井高尚書簡集」)、『国文学研究』第55号(一九七五年二月)。行移りを示すも同論による。

(29) 『釈』における引用書の全容については、茅場氏前掲注(10)論文に詳しい。

(30) 国文学研究資料館蔵「土佐日記」(サ5-12)。見返しには「文政五年壬午二月廿二日 清水宣昭」との記述が見える。また安藤直太郎氏が宣昭書き入れ本『伊勢物語』をご所蔵の由である(岡田稔氏「清水宣昭」『郷土文化』第17巻3号 一九六二年八月)。

(31) 文政十三年七月十七日付書簡(森繁夫氏「藤井高尚と清水宣昭」(下)『国語国文』第10巻11号 一九四〇年一月)

(32) 天保二年四月十一日付書簡(飯田正一氏「藤井高尚書簡集」(三)『国文学研究』第57号 一九七五年一〇月)。茅場氏は「高尚この年六十八歳であり、『日記釈』に対する姿勢といい、狭衣物語校合本の提供といい、宣昭に恃むところが大きかったことをうかがわせる」(前掲注(6))「清水宣昭考」(三)と述べておられる。

(33) 市橋鐸氏『文化財叢書第四十八号 なごや本綴足』(一九六九年、名古屋市教育委員会)。これを所蔵したという奥田常雄については、稿を改めて論じることとしたい。

(34) 西本氏前掲注(27)論文。宣長奥書本からはじまる「とりかへばや」享受については、同氏「とりかへばや」蓬萊氏系統の伝本をめぐる考察―本居宣長の奥書を起点として―(『国文学攷』第178号 二〇〇三年六月)に詳しい。

(35) 『玉の小櫛のそへ櫛』は、その名のとおり『玉の小櫛』の増補を宣昭が試みた一書であったようだが、現在は所在不明(工藤進思郎氏「清水宣昭の源氏物語研究―『玉の小櫛のそへ櫛』・『雨夜物語品定参注』について―」『藤井高尚と松屋派』一九八六年、風間書房)。

(36) 本居宣長記念館蔵「紫式部日記釈」による。なお、この袋のおもて書が

高尚の筆になることについては、茅場氏前掲注(5)「清水宣昭考」(三)に詳しい。

(37) 田中氏前掲注(16)論文。田中氏は、『古今集連鏡』における宣長の俗語訳に対する認識について、「従来の注釈に取って代わるものとしての役割を担いとうという確信があった」と指摘され、「初学者と熟練の学者を隔てるものではない」と述べておられる。

〔付記〕

貴重な御蔵書の閲覧、掲載をおゆるしくくださった諸機関およびその関係者の方々に深謝申し上げます。

本稿は、15th International Conference of the European Association for Japanese Studies (二〇一七年八月、於リスボン大学)におけるバネル「Commentary, Vernacularization, and Pictorialization: New directions in the study of Murasaki Shikibu's Edo-period legacy」の口頭発表「Tales, Diaries, and Kokugakusha: The Diary of Murasaki Shikibu」に基づく。同バネルのメンバー(ゲイ・ローリー氏、新美哲彦氏、レベッカ・クレメンツ氏)および席上貴重な教示を賜った諸先生方に記して御礼申し上げる。なお、同バネルは江戸時代における紫式部作品のありようを考究するものであったため、俗語訳については『源氏物語』との関わりのみを取り上げた。しかし、宣長の流れをくむ和学者たちは、『百人一首』などの俗語訳も生み出している。俗語訳全体における『釈』の位置付けについてはなお検討を重ねることとした。

本研究は、JSPS 科研費 JP23720130 の助成を受けたものである。

— おがわ・ようこ、岐阜大学准教授 —